

中医学の真髄に触れる

# 中薬の配合

丁光迪 著・小金井信宏 訳

A5判／並製／本文576頁／定価：5,670円(税込)

老中医が語る、  
配合法則のすべて。  
読んで味わう中医用薬の奥深さ。

- ◆ 著者は多年にわたる臨床経験・教育経験をもつ中国の名中医。
- ◆ 臨床効果を上げるために不可欠な中薬の配合法則について詳しく解説。
- ◆ 中薬理論を有効に臨床に結びつけるための知識がふんだんに盛り込まれている。
- ◆ 歴代の数多くの配合学説を整理・総括したうえで、著者自身の豊富な経験も紹介。
- ◆ どこから読み始めても味わい深く、中医学の真髄に触れることができる。
- ◆ 中国では中医薬系大学院生の必読書として増刷を重ねる名著。
- ◆ 中医薬学の基礎をある程度学んだ中・上級者に最適の一冊。



丁光迪 (ていこうてき) | プロフィール

1918年、中国江蘇省で中医師の家系に生まれる。17歳から父の丁諫吾氏について中医を学ぶ。20歳で独立、開業。南京中医学院で講師・教授・大学院(博士課程)の指導教官などを歴任。教科書の編纂に主編として参加。著書に『東垣学説論文集』『金元医学』『諸病源候論養生方導引法研究』など。臨床面でも時疫病・脾胃病・婦人病などの分野で功績がある。

中医学を学ぶための雑誌『中医臨床』(季刊)ますます面白く、実用的な内容になっています。

東洋学術出版社 ご注文は、メールまたはフリーダイヤルFAXで FAX.0120-727-060

〒272-0822 千葉県市川市宮久保3-1-5 / TEL.047-371-8337 / E-mail: hanbai@chuui.co.jp / ホームページ ●http://www.chuui.co.jp / ●http://www.chuui.com/

# 中薬の配合——老中医が語る、配合法則のすべて

## ◆ 目次 ◆

### 1 四気五味による薬の組み合わせ

1. 辛甘発散 [辛甘薬による発散]
2. 寒涼清熱 [寒涼薬による清熱]
3. 苦寒清熱 [苦寒薬による清熱]
4. 苦酸泄熱 [苦酸薬による泄熱]
5. 苦辛通降 [苦辛薬による通降]
6. 辛熱温中回陽 [辛熱薬による温中回陽]
7. 辛熱除痺止痛 [辛熱薬による除痺止痛]
8. 甘淡利湿 [甘淡薬による利湿]
9. 清熱利湿 [清熱薬による利湿]
10. 芳香化湿 [芳香薬による化湿]
11. 苦陰燥湿 [苦陰薬による燥湿]
12. 昇陽除濕 [昇陽薬による除濕]
13. 通陽化湿 [通陽薬による化湿]
14. 淡以斂蓄 [淡味薬による斂蓄]
15. 鹹以軟堅 [鹹味薬による軟堅]
16. 酸以収斂 [酸味薬による収斂]
17. 香薬走竅 [香薬による走竅]
18. 薬性の裁成 [加工による薬性の変化]

### 2 昇降浮沈による薬の組み合わせ

1. 昇降気機 [気機の昇降]
2. 昇降肺氣 [肺氣の昇降]
3. 昇降肝肺 [肝と肺の昇降]
4. 昇降脾胃 [脾胃の昇降]
5. 昇降腸脾 [昇降法による腸脾治療]
6. 昇陽瀉火 [昇陽法による瀉火]
7. 昇陽散火 [昇陽法による散火]
8. 昇降相因 [昇と降の相因関係]
9. 昇水降火 [昇水法による降火]
10. 交通心腎 [心腎不交の治療]
11. 開上通下 [気滞による便秘・無尿・少尿の治療]
12. 堤壺揭蓋 [吐法による排尿障害の治療]
13. 上病下取 [瀉火通腑薬による上部実火証の治療]
14. 輕可祛実 [輕薬で実を去る]
15. 逆流挽舟 [汗法による下痢治療]
16. 散風止利 [昇陽止瀉]
17. 釜底抽薪 [瀉下法による熱証の治療]
18. 行気降氣 [行気法による降氣]
19. 引火帰原 [格陽・戴陽の治療]
20. 介類潜陽 [介類薬による潜陽]
21. 重鎮摂納 [重薬による鎮逆・摂納]

### 3 虚実補瀉による薬の組み合わせ

1. 苦寒瀉下 [苦寒薬による瀉下]
2. 温経通下 [温経薬による通便]
3. 攻下逐水 [攻下薬による逐水]
4. 滑潤通便 [潤腸薬による通便]
5. 辛甘扶陽 [辛甘薬による扶陽]
6. 甘温益氣 [甘温薬による益氣]
7. 補氣生血 [補氣薬による生血]
8. 甘薬守中 [甘薬による守中]
9. 甘涼潤濁 [甘涼薬による滋陰・潤燥]
10. 甘膩滋填 [厚味の甘潤滋膩薬による滋陰]
11. 調補奇経 [奇経の治療]
12. 酸甘化陰 [酸甘薬による化陰]
13. 養陰清熱 [養陰薬による清熱]
14. 滋陰瀉火 [滋陰薬による瀉火]
15. 苦辛酸清熱安胃 [苦辛酸薬による清熱安胃]
16. 斂散同用 [収斂薬と発散薬の併用]
17. 剛柔相濟 [剛薬と柔薬の併用]
18. 消補兼施 [消薬と補薬の併用]
19. 寒熱併用 [寒薬と熱薬の併用]
20. 潤燥互用 [潤薬と燥薬の併用]
21. 表裏上下分消 [分業による邪氣の解消法]
22. 進退法・倒換法・變通法
23. 服食方法
24. 吸煙氣法 [吸入剤]
25. 敷貼熨法 [外治法]

### 4 臟腑虚実標本による薬の組み合わせ

肝・胆／心・小腸／脾・胃／肺・大腸／腎・膀胱／三焦

### 5 婦経・引経による薬の組み合わせ

黄連／細辛／蘘本／黄柏／独活／桂枝／肉桂／知母／羌活／桔梗／升麻／葱白／白芷／石膏／蒼朮／葛根／白芍／柴胡／牡丹皮／連翹／地骨皮／青皮／附子／呉茱萸／川芎／◇六経用薬法 (附：三焦用薬法)

### 6 類化裏受による薬の組み合わせ

1. 薬物の類化佐使 [佐使薬による作用の変化]
2. 臟腑の裏受は千差万別
3. 薬は虚実寒熱に応じて使わなくてはならない
4. 用薬には五方の違いによる向き不向きもある
5. 薬物と食物の相反

### 7 常用方剤の用薬分析と使用法

解表剤／清熱瀉火剤／瀉下剤／温中回陽剤／祛湿剤／祛痰剤／熄風安神剤／理氣剤／理血剤／補益剤

## 4 苦酸泄熱 [苦酸薬による泄熱]

「苦酸泄熱」という薬の組み合わせ方も、清熱剤に属するもので、主に熱毒内盛証の治療に使われます。孫思邈はこの方法を高く評価し、「千金要方」10巻に以下のような言葉を残しています。

「除熱解毒を行う場合、苦酸法に勝るものはない。具体的には、苦参・青葙・艾・山梔子・葶藶子・苦酒・烏梅などを多用することが大切である」「熱が強い場合、苦酸薬を使わなければ、問題を解決することはできない。(中略)裏熱証を治療する場合、病状による段階別の用薬順序にとらわれず、青葙・苦参・艾・苦酒を使って治療を行うことができる」

「熱が強い場合は、その程度にあわせて」薬を服用する回数を少しずつ増やしさえすれば、治らないものはない」

このような非常に特色のある用薬法は、隋唐代の風潮を反映したものです。特に苦薬に酸薬を合わせるという組み合わせ方は、「傷寒論」で烏梅丸が示している用薬法を発展させたものといえます。孫氏があげた薬の中では、苦参・青葙・山梔子が特に多用されます。また、ここでの艾には「火鬱発之」(鬱熱を冷ますには、鬱を解き、氣の流れをよくする必要がある)の意味があります。葶藶子は、氣味は辛・苦・大寒・無毒で、瀉肺・瀉水作用のほか、体内に停滞している熱を下に降らすことのできる薬です。

苦酸法による方剤の中で多用されるものとしては、例えば2升の酒に1両の苦参を入れ、1升になるまで煎じてから、これを1度に服用する方法があります。温毒による重症患者に、この薬を服用させて吐かせたり、また服用後、少し厚着させて汗をかかせたりしますが、どちらの方法でも治療させることができます。

また熱毒が手足を侵し、局部が赤く腫れ、灼熱感や痛みを伴う場合、この薬を外服薬として使うこともできます。また5～6日以上続く熱病で、寒熱が下らない場合、苦酸湯を使うことができます。苦酸湯は、苦参・

## 3 薬本

(辛・温・無毒。足太陽の本経薬。督脈の病を治療する作用もある)

### 1 風邪による頭痛を治療する

風寒の邪氣が太陽経を侵すと、頭痛・頭頂部の痛み・痛みが歯や頬に及ぶ、などの症候が現れます。薬本は、このような症候を治療することのできる薬です。張元素は「薬本は太陽経の風薬である。寒氣が本経を侵すと頭痛が生じる。これを治療する場合、薬本の勇壯な氣は、不可欠のものである。頭頂部の痛みも、薬本を使わずに治療することはできない」と述べています。木香を合わせると、辛温性・芳香性による開発昇散作用が強められるので、霧露の清邪が上焦を侵した病証を治療することができます。白芷を合わせて顔に塗る方法でも同様の作用があり、清氣を顔に向かわせる作用がさらに強くなります。また羌活・蔓荊子を合わせて、頭風頭痛を治療する方法も多用されます。これらの方法は、みな風寒の邪氣(同時に湿邪が存在する場合もある)による外感病を治療する方法です。

※霧露の清邪：体の上部や体表部を侵す性質のある邪氣。

### 2 風湿による身痛を治療する

風寒湿による病で、体の痛み・腰痛・腰が冷える、などの症候がみられる場合、薬本に羌活・独活・蒼朮を合わせて使います。これは祛風勝湿作用によって痛みを止める治療法です。

督脈の病で、頭痛・背中の硬直・手足の冷えなどの症候がみられる場合、薬本に羌活を合わせて使います。佐薬として官桂を加えることもあります。慢性的な痛みには、さらに細辛を加えると効果を高めることができます。

1. 四気五味による薬の組み合わせ

鶏子(卵)を加えます。薬を服用して汗をかけば治癒します。

また『証証活人書』には寒濕苦酒湯という方剤が載っています。苦酒1升・生艾汁半升・葶藶膏1合よりなる方剤です(3服分の用量)。これは7～8日続く傷寒で、内熱が解消されない病証に使います。これらの例からも、過去の大家たちの苦酸法に対する経験の豊富さを知ることができます。

慶安時は『傷寒総病論』3巻で、苦酸法に関する以下のような鋭い分析を提示しています。

「生姜・桂枝・人参などの辛甜味薬には、發散寒氣作用があるので、まだ邪氣が体内に入り込んでいない場合、つまりまだ内熱証になっていない場合に使用する。このような辛甜薬の作用は調治と呼ばれる。これに対し苦酸薬には、正治法によってすみやかに内熱を治療する作用がある。辛甘薬に苦酸薬を合わせる、また苦酸薬に辛甘薬を合わせる、というような陰陽の法則に背いた用薬法は、病氣を悪化させるだけである」

## 5 苦辛通降 [苦辛薬による通降]

「苦辛通降」(辛開苦泄)とは、辛味薬と苦味薬を合わせて使う方法です。辛味薬には、桂枝・乾姜・半夏・生姜・橘皮・香附子・呉茱萸などがあり、すべて宣通気機・祛寒化濕・和胃降逆などの作用があります。苦味薬には、黄連・黄芩・枳殼・枳実などがあり、すべて泄熱・和胃・消積除満などの作用があります。そして、辛味薬と苦味薬を合わせた苦辛通降法には、調和寒熱・開通気機・通降除痰・消積除満などの作用があります。苦辛通降法による方剤は「和緩剤」「理氣剤」に分類され、胸膈(胸部の痛みや閉塞感)を主訴とする病証や痞滿(腹部において上下の氣の流れが滞ったために生じる病証)などの治療に多用されます。

5. 婦経・引経による薬の組み合わせ

### 3 頭部・顔面部の風邪を去る

風湿の邪氣が頭部や顔面部を侵し、湿疹・皮膚の損傷・鼻が赤紫色になる・にきび・頭皮が剥がれる、などの症候がみられる場合、薬本に白芷を合わせて使います。内服薬として使うこともできますし、粉にして外用薬として使うこともできます。祛風勝湿作用によって、皮膚は新生し、顔色もよくなります。『便民図彙』には、同量の薬本と白芷を粉にし、これを夜間髪に擦り込み、朝起きたら拭く方法が載っています。数日続けると、割れた頭皮をきれいにすることができず。

### 4 胃痛泄瀉を治療する

湿邪が氣の流れを阻害し、風木が胃を侵すと、口がベタベタする・唾液が多い・突発的に起こる胃痛・胃が傷むと下痢をする、などの症候が現れます。これを治療するには、薬本に蒼朮(または陳皮・香附子)を合わせて使います。煎じて内服する方法と、粉にして生姜湯で服用する方法とがあります。下痢が胃痛を伴う場合にも使うことができます。

また胃痛や腹痛は顯著でなく、お腹がゴロゴロ鳴り、腹中が切迫して頻繁に下痢をし、下した後は楽になるような状況もあります。これは風木が土を侵し、湿邪が強まったために起こるものです。治療には、薬本に白芷・白朮・陳皮・甘草を合わせて使います。陽氣を上昇させることで、下痢を治療する方法です。確かな効果があります。

### 5 帯脈の病(婦人科)を治療する

おりものが多い(サラサラしていて臭いはない)、または腰の出血が止まらない(色は薄く血塊は少ない)という病証を、李東垣は湿邪による病だと考えました。そして薬本と白芷を主薬として治療を行う方法を作り出しました。湿邪が強い場合、蒼朮・白朮を加えます。出血が止まらない場合は、防風・荆芥を加えます。下痢が顯著な場合は、升麻・柴胡・羌活・独活を加えます。これは昇陽除濕法と呼ばれる、非常にすぐれた治療効果